
研究報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂大学保健看護研究 6
P.26-33 (2018)

看護教育における現象学的研究の文献レビュー

A Review of Phenomenological Literature in Nursing Education

飯塚麻紀¹⁾

IITSUKA Maki

榎本佳子¹⁾

ENOMOTO Yoshiko

福田大祐²⁾

FUKUTA Daisuke

要旨

目的：国内外の看護教育における現象学的研究を概観し、今後の活用可能性を検討する。

方法：医学中央雑誌 Web 版および PubMed を用いて、過去 5 年間（2012 年～2016 年）の文献検索を行った。分析項目は、発行年、対象者、対象者数、分析方法、データ収集方法、調査内容とした。

結果：対象文献は計 25 件で、国内 7 件、国外 18 件であった。発行数は 2013 年以降横ばいであった。対象者は、学生 15 件、教員 3 件、臨床指導者 3 件、その他 4 件で、国内文献は学生と臨床指導者のみであった。対象者数は、6～10 名が 10 件で最も多く、範囲は 1 名から 112 名であった。データ収集方法は個別インタビュー 15 件以外に記録物などもあり、国外文献では分析方法は多岐にわたっていた。調査内容は、【学生理解】【臨床実習指導】【教育プログラム】【教授方略】【倫理教育】【大学院教育】の 6 つに分類された。

考察：わが国では、看護教育における現象学的研究の活用は少ない現状にあった。今後は、学生を取り巻く教員や患者などにも対象を広げ、国内文献では認められなかった【教育プログラム】【教授方法】【大学院教育】での現象学的研究の活用可能性が示唆された。

索引用語：現象学、看護学生、教育、文献レビュー

Key words：phenomenology, nursing students, education, literature review

1. はじめに

看護系大学の急激な増加に伴い、看護学生に対する教育方法への関心は高まっている。看護教育場面では、看護学生の臨床実習に焦点をあてた研究¹⁾、特定の看護技術に焦点をあてた研究²⁾、近年ではアクティブ・

ラーニングなどの教授方法に焦点をあてた研究^{3) 4)}が行われており、その教育効果が明らかにされている。また、看護学生には、患者や家族の反応を俊敏に捉えこまやかに対応するために、「価値あるものに気づく能動的な能力」⁵⁾である感性や倫理性を養っていくことが求められる⁶⁾。これまでの報告では定量的、定性的な手法で実態調査や教育効果が検討されてきたが、看護学生や教員、臨床指導者など、看護学生の教育に携わる者の現象の捉え方や学習の習得過程の体験につ

1) 順天堂大学保健看護学部

2) 筑波大学附属病院看護部

1) *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*

2) *Nursing Department, University of Tsukuba Hospital*

(Nov. 10, 2017 原稿受付) (Jan. 19, 2018 原稿受領)

いて明らかにしていくことは、関係者相互の理解の上
に教育を行う上で重要であると考えられる。

近年、対象者の体験を理解し明らかにしていく研究
手法として、現象学を用いたアプローチが注目を集め
ている。現象学とは、「個々人にとって物事がどのよ
うに見え、どのように経験されているのかを大事にし、
いわばその当事者それぞれの視点からの物事の捉え方
やその違いを明らかにしようとする哲学」⁷⁾であると
説明される。そのため、現象学的研究は、看護教育領
域においても、看護学生や教員の体験世界をありのま
まに理解し記述するために有用な手法になると考えら
れる。

そこで本研究では、過去5年間(2012年～2016年)
に報告された国内外の研究を概観し、わが国の看護教
育領域における現象学的研究の活用可能性と課題につ
いて検討することを目的とする。

II. 研究目的

1. 対象文献の選定

医学中央雑誌 Web 版および PubMed を用いて、過
去5年間(2012年～2016年)の文献検索を行った。
検索キーワードは、国内文献は「現象学」、「看護学
生」、「教育」、国外文献は「phenomenology」、「nursing
students」、「education」を用いた。これらの文献のうち、
1)看護系学会誌・看護系雑誌に掲載された論文、2)日
本語もしくは英語の論文、3)看護学生教育に関する
論文を、今回の対象文献とした。キーワード検索の結
果、医学中央雑誌 Web 版では9件、PubMed では30
件の計39件が抽出され、そのうち、選定基準を満たし、
今回の分析対象となった文献は25件であった。

2. 分析方法

分析項目は、論文構成の主要項目である発行年、対
象者、対象者数、データ収集方法、分析方法、調査内
容とした。独自にレビュー用紙を作成して文献毎に整
理し、記述統計を行った。質的データである調査内容

は、文献毎に「何を明らかにしているのか」を抽出し、
それは「どのような分野か」という視点で分類した。
なお、分類に際しては、日本看護教育学会で用いられ
ている細目分類を参考にした。

分析は、看護大学生の教育に携わる成人看護・高齢
者看護の大学教員2名、および大学病院精神科病棟の
臨床指導者1名の計3名の研究者で行った。分析過程
においては、適宜、文献の意味内容および分析内容や
結果についての検討会を実施し、妥当性と信頼性の確
保に努めた。

文献を取り扱う際には、著作権を侵害することがな
いよう配慮した。

III. 結果

1. 対象文献

対象となった文献25件のうち、国内文献は7件、
国外文献は18件であった(表1)。なお、表1の文献は、
引用文献への記載を省略した。

2. 文献の発行年

2012年から2016年の5年間の文献数を図1に示
した。対象文献は、2012年は国外文献が2件のみ
であったが、2013年以降にやや増加し、2014年と
2016年が最多でそれぞれ7件であった。

図1 文献の発行年

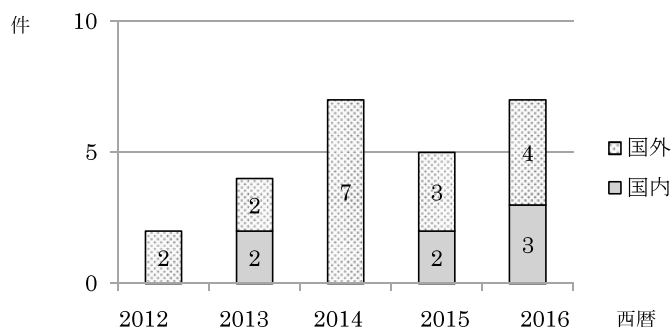


表 1 対象文献一覧(年代順)

No	著者	タイトル	出典
1	菊地麻由美他	初めての看護学実習における学生の臨床の見え方の変化	日本看護教育学会誌, 26(1), 2016
2	Maltby HJ et al.	Being the stranger : Comparing study abroad experience of nursing students in low and high income countries through hermeneutical phenomenology	Nurse Education today, 45, 2016
3	正村啓子	「その人に最善のケア」を創造するために基本的なこと：看護の判断に迷った臨床実習中の看護学生への指導の一経験を質的に分析する	山口医学, 65(1), 2016
4	松井弘美	指導を担う臨床助産師が学生に期待する分娩10例における学び	母性衛生, 56(4), 2016
5	Schmidt BJ	Core professional nursing values of baccalaureate nursing students who are men	Nursing Ethics, 23(6), 2016
6	Tee S et al.	Promoting positive perceptions and person centered care toward people with mental health problems using co-design with nursing students	Nurse Education today, 44, 2016
7	Watson B et al.	Using Facebook to enhance commencing student confidence in clinical skill development : A phenomenological hermeneutic study	Nurse Education today, 45, 2016
8	Eskilsson c et al.	The experiences of patients receiving care from nursing students at a Deicated Education Unit : A phenomenological study	Nurse Education in Practice, 15, 2015
9	Loversidge J et al.	Faculty perception of key factors in interprofessional education	Journal of Intrprofessional care, 29, 2015
10	Sampaio AV et al.	The experience of nursing students death and dying	Invest Educ Enferm, 33(2), 2015
11	谷口初美他	助産師実習と助産師教育の課題	日本助産学会誌, 29(2), 2015
12	De Jesus IS et al.	Learning in the informal space and re- signification of the existence of undergraduate students of nursing	Rev Lat Am Enfermagem, 22(5), 2014.
13	Hazel M et al.	Student nurses' views on respect towards service users - an interpretative phenomenological study	Nurse Education Today, 34, 2014
14	松井弘美他	助産学生の分娩介助実習における学びの現象学的探究	母性衛生, 55(1), 2014
15	Mott J	Undergraduate nursing student experience with faculty bullies	Nurse educator, 39(3), 2014
16	Pamela M	Enabling Narrative Pedagogy : Inviting, Waiting, and Letting Be	Nursing Education Perspective, 35(4), 2014
17	Scheckel MM et al.	An Interpretive Study of Nursing Students' Experience of Caring for Suicidal Persons	Journal of Professional Nursing, 30(5), 2014
18	Wilson AM	Application of Heideggerian Phenomenology to mentorship of nursing students	Journal of Advanced Nursing, 70(12), 2014
19	Wilson AM	Mentoring student nurse and the education use of self : A hermeneutic phenomenological study	Nurse Education Today, 34, 2014
20	Curtis K.	21st Century challenges faced by nursing faculty in educating for compassionate practice: Embodied interpretation of phenomenological data	Nurse Education Today, 33, 2013
21	Keiko MASMURA	A pathway to excellent nursing practice: analyses of a Japanese nursing student's experience of care using the model of "Pathways to Excellent Nursing Practice" (PENP)	医学と生物学, 157(4), 2013
22	正村啓子	卓越した看護実践の基盤としての“倫理”：患者を大切に看護するとはどういうことか	医学と生物学, 157(6), 2013
23	Walton J et al.	The experience of nursing students visiting older adults living rural communication	Journal of Professional Nursing, 29(4), 2013
24	DeBoor SS et al.	The Lived Experience of Non-Degree Learners From a Time-Modified Traditional Baccalaureate Nursing Program	Journal of Nursing Education, 51(4), 2012
25	Fattemeh k et al.	Students' perception about logbook: advantages, limitation and recommendation – a qualitative study	J Pac Med Assoc, 62(11), 2012

3. 文献の対象者

対象者の内訳は、学生 15 件、教員 3 件、臨床指導者 3 件、その他 4 件であった (表 2)。その他の 4 件は全て国外文献で、学生および教員を対象としたものが 2 件 (No.12,16)、学生および地域住民を対象としたものが 1 件 (No.23)、学生のケアを受けた患者を対象としたものが 1 件 (No.8) であった。

表 2 文献の対象者、対象者数、データ収集方法

	(n=25)		
	文献数		計
	国内	国外	
対象者			
学生	5	10	15
教員	0	3	3
臨床指導者	2	1	3
その他	0	4	4
対象者数			
1-5名	4	1	5
6-10名	1	9	10
11-20名	2	4	6
21名以上	0	4	4
データ収集方法			
インタビュー			15
個別	2	10	12
グループ	0	2	2
個別・合同	1	0	1
記録物			4
学生	2	1	3
臨床指導者	1	0	1
複合			6
個別インタビュー+フィールドノート	0	3	3
個別インタビュー+記録物	0	3	3

4. 文献の対象者数

対象者数は、5 名以下の文献が 5 件、6 名～10 名が 10 件、11 名～20 名が 6 件、21 名以上が 4 件であった (表 2)。21 名以上を対象とした調査はすべて国外文献 (No.2,9,16,23) であり、最多は 112 名 (No.23) であった。国内文献は 1 名～5 名が 4 件と最も多く、うち 3 件は最小の 1 名 (No. 3,21,22) であった。

5. 文献のデータ収集方法

データの収集方法はインタビューが 15 件で最も多

く、そのうち個別インタビューが 12 件、グループインタビューが 2 件 (No.12,25)、個別インタビューと合同インタビューを行ったものが 1 件 (No.1) であった。No.1 の文献については、対象者が 2 名であったことから合同インタビューとし、グループインタビューとは区別して分類した。記録物の内訳は、学生の記録が 3 件 (No. 2,21,22)、臨床指導者の記録が 1 件 (No. 3) であり、4 件中 3 件が国内文献であった。その他、複合方法が 6 件であり、内訳は、インタビュー中のフィールドノートが 3 件 (No. 7,9,15)、対象者の記録物が 3 件 (No.18,19,23) で、すべて国外文献であった (表 2)。なお、計 18 件の個別インタビューのうち、対面ではなく電話による調査は 1 件 (No.16) であった。

また、対象者数とデータ収集方法との関係を確認したところ、対象者数が 21 名以上の 4 件のデータ収集方法は、個別インタビュー (30 名) (No.16)、学生の記録物 (44 名) (No. 2)、グループインタビュー (30 名) (No. 9)、個別インタビューと日誌 (各 16 名と 96 名の計 112 名) (No.23) であった。

6. 文献で使用された分析方法

全 25 件のうち、分析方法が明記された文献は 20 件であった。そのうち Giorgi によるもの 3 件 (No. 4,14,25)、Colaizzi によるものが 3 件 (No.11,15,24)、van Manen によるものが 3 件 (No. 5,7,23)、自作の方法が 3 件 (No. 3,21,22) であった (表 3)。なお、自作の方法による研究は全て国内の同一研究者によるもので

表 3 文献で使用された分析方法

	(n=20)		
	文献数		計
	国内	国外	
Giorgi	2	1	3
Colaizzi	1	2	3
van Manen	0	3	3
自作	3	0	3
その他	0	8	8

あった。その他の8件 (No. 2,8,9,10,13,16,17,20) は全て国外文献で、Lindeth and Norberg, Dahlberg, Galvin and Todres など全て異なる分析方法であった。

7. 文献の調査内容

現象学を用いて行われた各文献の看護教育分野の分類結果を表4に示した。

看護教育分野は、【学生理解】、【臨地実習指導】、【教育プログラム】、【教授方略】、【倫理教育】、【大学院教育】の6つに分類された。件数は、【学生理解】が8件、続いて【臨地実習指導】が5件と多く、【大学院教育】は1件であった。

IV. 考察

1. 国内外における研究の比較

1) 看護教育領域における現象学的研究数の比較

「現象学」を除いた「看護学生」と「教育」の2つのキーワードで原著論文の検索を行うと (2012年～2016年)、医学中央雑誌 Web 版では2,483件、PubMedでは259件がヒットし、看護学生教育に関する研究は、国内で広く行われている。一方、「現象学」をキーワードに加えて検索すると、国内文献は9件 (0.4%)、国外文献は30件 (11.6%) であり、看護教育領域における現象学的研究は、特にわが国において少ない現状にあることが示唆された。

表4 文献の内容別にみた看護教育分野

分野 (件数)	内 容	文献No
学生理解 (8)	初実習における学生の臨床の見え方の変化	1
	男子学生の大学教育におけるケアリング修得の様相	5
	大学教育における学生の生と死の体験	10
	学士課程の助産実習が学生の学びの過程にもたらした意味	11
	助産学生の分娩助産実習における学びの本質とプロセス	14
	教員から嫌がらせを受けた学生の体験	15
	自殺企図者に関わる学生の体験	17
	学士課程初年度の学生の看護教育の中での経験	24
臨地実習指導 (5)	「その人に最善のケア」を導いた臨床指導者と学生相互作用	3
	指導助産師が期待する学生の学びの本質とそのプロセス	4
	臨床指導者が看護専門職としての学びを指導する上での経験	18
	臨床指導者が自分自身を教育的に使うという経験	19
	看護学生からケアを受けた患者の経験	8
教育プログラム (4)	海外研修プログラムの訪問国の違いによる学生の文化的意識の成長	2
	精神的健康問題を持った人に対する学生の経験の教育プログラムへの反映	6
	他職種連携教育カリキュラムに関する医学・看護学教員の経験	9
	訪問プログラムにおける学生と地域住民の体験と関係性の変化	23
教授方略 (4)	Facebookの使用を追加した場合の学生の臨床スキル向上への自信	7
	ナラティブ教育における教員の実践	16
	学生が思いやりのある実践をするための教員の経験	20
	学生が認識するLogbookの長所と短所および改良点	25
倫理教育 (3)	学生の臨床における患者への敬意についての学習体験	13
	学生が卓越した看護実践を行うために重要な要素	21
	学生が患者を大切にすることとはどういうことか	22
大学院教育 (1)	授業以外のキャンパス内での看護大学院生の学びの体験	12

過去5年間の文献数の推移では、2014年のみ国外文献が増加しているものの、国内文献は2013年以降、ほぼ横ばいの傾向であった。2000年から2008年までの9年間の国内の現象学的アプローチによる研究の動向を明らかにした調査でも、看護教育などの看護領域をテーマとする文献は9件であったと報告されており⁸⁾、わが国の看護教育における現象学的研究は増加の傾向にあるとは言い難い。また、筆頭著者名の確認では、国内文献7件のうち、同一著者がそれぞれ3件および2件を報告しており、現象学を活用する研究者は限られている現状にあると考える。

2) 文献の対象者とデータ収集方法の比較

文献の対象者は、学生、教員、臨床指導者、その他に分類され、国内文献は全て学生もしくは臨床指導者を対象としていた。一方、国外文献では、教員のほかに、その他として学生のケアを受ける患者や住民なども対象としていた。現象学を説いた哲学者ハイデガーによれば、人は自分が関わっている存在を通して自己を理解すると説明される⁹⁾。看護学生の学習環境には、常に身近な存在として教員や患者が存在している。そのため、教員や患者の体験、あるいは学生との相互主観的な関係性を理解することは重要な課題であり、さらなる学生理解にもつながると考えられる。

対象者数は1名から112名と幅があった。国内文献は5名以下が半数を占めており、データ収集方法は個別インタビューもしくは記録物によるものであった。一方、国外文献は1件を除き対象者数は6名以上であり、最多は112名であった。データ分析方法は、個別インタビューに記録物を追加したものやグループインタビューも用いられていた。「現象学的な質的研究は普遍ではなく真理を語るがゆえに1例だけの分析が意味を持つ」¹⁰⁾場合や、複数で「単一の構造に達することができる」¹¹⁾場合もある。データ収集方法も様々であったが、ベナー¹²⁾は、「個人あるいはグループでのインタビュー、参加観察、ビデオ、記録、公式文書、

メディア、その他多くのデータ源を含むテキストが探求方針を基盤に選択される」と述べている。以上のことから、現象学を研究に取り入れる場合、明らかにしたい現象の記述を可能とする対象者数、データ収集方法を吟味し、実現可能性も踏まえたうえで決定することが重要であると考えられる。

3) 文献の調査内容の比較

調査内容は【学生理解】、【臨地実習指導】、【教育プログラム】、【教授方略】、【倫理教育】、【大学院教育】の6つに分類された。国内文献(No.1,3,4,11,14,21,22)は【学生理解】、【臨地実習指導】、【倫理教育】の3分野のいずれかに含まれていた。

国内文献が【学生理解】や【臨地実習指導】の中で焦点を当てていたのは実習場面であった。一方、国外文献では教員から嫌がらせを受けた学生の体験(No.15)なども含まれ、より広い視点から教育場면을捉えていることが明らかとなった。近年、わが国でも看護師のパワーハラスメント¹³⁾や医学生のアカデミックハラスメント¹⁴⁾などの調査が散見されるようになった。しかし看護学生を対象とした調査は見当たらないことから、今後、現象学的方法を活用して記述可能なテーマであると考えられる。

【教育プログラム】、【教授方略】、【大学院教育】は国外文献にのみ認められた内容であった。わが国は、看護学部および大学院ともに増加傾向にあり、大学は独自の特色を生かしたカリキュラムの組み立てを行っている。【教育プログラム】における学生と教員の体験や、【教授方略】として積極的に取り入れているグループワークや技術演習、模擬患者参加型教育などのアクティブ・ラーニング^{3) 4) 15)}における学生の習得過程の体験を明らかにすることにおいても、現象学的方法の活用可能性が示唆された。また、大学院教育に関する研究では、質的記述的方法を用いて、博士論文作成過程の学生や教員の体験や困難感¹⁶⁾¹⁷⁾などが分析されている。現象学的方法により、さらに体験世界をあり

のままに明らかにしていくことが可能になると考える。

4) 文献で使用された分析方法の比較

これまでの現象学的研究の文献レビューでは、Giorgi, Colaizzi, Benner の分析方法が多く使用されていたが⁸⁾¹⁸⁾、今回のレビューでは、分析方法は特に国外文献で多岐にわたっていた。その他として使用されていた分析方法は、1994年 (Miles and Huberman) から 2011年 (Galvin and Todres) にかけて発表されており、近年、国外では現象学を用いた分析方法が多く開発され、研究者もテーマに応じて使い分けている現状が示唆された。

2. わが国の看護教育における現象学的研究の活用可能性と課題

今回のレビューでは、わが国の看護教育における現象学的研究の増加はなく、研究者も限られていることが明らかとなった。また、対象文献にはカテゴリー・サブカテゴリーに分類したものもあったが、このような分析は、事実そのものをあるがままに理解しようとする現象学の態度とは異なる¹⁸⁾との考え方もある。哲学としての現象学は独特の用語を使い独学では難解である⁹⁾。さらに近年の分析方法の多様化は、研究方法の選択肢増加の一方で、研究者に現象学と研究方法のより深い理解を求めることになる。そのため、研究者自身の研鑽とともに、大学院教育や学習会等で指導者からの学びを受けられる機会を増やすことも課題であると思われる。

調査の対象者は、学生と臨床指導だけでなく、学生を取り巻く様々な人へ広げることが課題である。また、看護教育を、実習場面に限らずに講義、演習、教育プログラム、カリキュラムに広げること、さらにハラスメントといった対象の体験などを含む大学生活など様々な視点から捉えることも課題である。それにより、対象者の体験世界を記述する方法として、看護教育の場面で現象学的研究の活用を広げていくことが可能であると考えられる。

3. 本研究の限界と課題

今回は、「現象学」のキーワード検索で抽出された文献を対象としたが、現象学的研究を厳密に定義づけた場合には異なる結果となった可能性がある。また、今回は医学中央雑誌 Web 版および PubMed のみの検索結果であり、対象文献が限定された可能性がある。しかし、現象学の視点を持った研究の、看護教育領域における動向と活用可能性を確認することができた。今後はデータベースを拡大してより広く文献検討を行い、実際に現象学的研究で行われた対象者の経験を比較検討するなどして、看護教育実践に活かしていくことが課題である。

V. 結論

国内外 25 件の文献を対象に、看護教育における現象学的研究の動向と内容を分析し、以下の結果を得た。

1. 看護教育における現象学的研究の報告は少なく、国内文献は 7 件であった。
2. 調査内容は、【学生理解】【臨地実習指導】【教育プログラム】【教授方略】【倫理教育】【大学院教育】の 6 つに分類された。
3. 国内では【教育プログラム】【教授方法】【大学院教育】に関する文献、教員や患者を対象とした文献が認められなかったことから、今後は対象や看護教育の視点広げた現象学的研究の活用可能性が示唆された。

本研究の一部は、第 37 回日本看護科学学会学術集会で発表した。

【引用・参考文献】

- 1) 村松由紀、重久加代子、橋本幹子、他：卒業前看護実践教科プログラムの実践と評価、国際医療福祉大学学会誌 21 (2)、92-102、2016。
- 2) 西山佐知子、内田一美、山田章子、他：看護学生

- の気管内吸引の技術習得における演習学習の効果、日本看護科学学会誌 36、172-178、2016.
- 3) 奥山真由美、道繁裕紀恵、杉野美和、他：高齢者の退院支援における看護実践能力育成のためのアクティブ・ラーニングを導入した老年看護学実習の評価、山陽論叢 22、11-20、2015.
- 4) 前田隆子、市村久美子、黒田暢子、他：周手術期看護の演習におけるアクティブ・ラーニングとその評価 — 学習効果および自己学習の動機づけとその達成感に焦点をあてて —、茨城県立医療大学紀要 20、13-23、2015.
- 5) 高橋史朗：感性をどう考えるか、高橋史朗編、現代のエスプリ、No.375、至文堂、32-37、1997.
- 6) 谷津裕子：看護における感性に関する基礎研究 — 「看護場面的写真」を鑑賞する看護者の反応の分析 —、日本看護科学学会誌 19 (1)、71-82、1999.
- 7) 榊原哲也：現象学はあなたもきっとおもしろい！、看護教育 57 (4)、医学書院、250-257、2016.
- 8) 千田みゆき：現象学的アプローチによる看護研究の動向 — 2000年から2008年まで — 埼玉医科大学看護学科紀要、17-23、2010.
- 9) Martin Heidegger: Sein und Zeit、1927、細谷貞雄訳、存在と時間 上 第21版、48、筑摩書房、1994.
- 10) 村上靖彦：現象学的な質的研究の方法論、看護研究、18 (6)、558-566、2013.
- 11) Amedeo Giorgi: The Descriptive Phenomenological Method in Psychology A Modified Husserlian Approach、2009、吉田章宏訳、心理学における現象学的アプローチ 理論・歴史・方法・実践 第1版、160、新曜社、2013.
- 12) Patricia Benner: Interpretive Phenomenology: Embodiment, Caring, and Ethics in Health and Illness、1994、相良 - ローゼンマイヤーはるみ監訳、解釈学的現象学 健康と病気における身体性・ケアリング・倫理 第1版、99、2006.
- 13) 坂口舞、三木明子：11 病院看護師のパワーハラスメントの被害経験が外傷性ストレス反応に及ぼす影響、労働科学 90 (1)、1-13、2014.
- 14) Kobayashi Sizuko Izumi Miki, Otaki Junji: Cross-sectional nationwide survey of academic dishonesty among Japanese medical students、医学教育 43、193、2012.
- 15) 谷村千華、西尾郁子、野口佳美、他：「対象理解」を学修目標とした模擬患者参加型教育の効果、米子医学雑誌 67、56-64、2016.
- 16) 中山登志子、舟島なをみ、定廣和香子、他：大学院看護研究科博士後期課程に在籍する学生の博士論文作成過程の経験、千葉看護学会会誌 21 (1)、33-42、2015.
- 17) 大熊恵子、関本朋子、グレッグ美鈴、他：質的研究方法による学位論文作成に際して看護系大学院生と指導教員が遭遇する困難、看護研究 46 (4)、418-428、2013.
- 18) 榎川綾子、黒澤昌洋、高橋照子、他：看護における現象学の活用とその動向 (その2)、日本看護医療学会雑誌、50-61、2011.